

## 令和4年度第2回愛媛県スポーツ推進審議会議事録

1 日 時 令和4年11月4日（金）10：00～11：30

2 場 所 愛媛県水産会館6階 大会議室

### 3 出席者等

#### (1) 出席委員（13名）

田口信教（会長）、牛山眞貴子、大瀧良子、大野加壽子、緒方義彦、  
久保田加寿美、河野賢嗣、清水貞之、寺尾和祝、友澤義弘、中川祐二、  
福井美香、渡部勇二 ※敬称略

(2) 事務局 高岡観光スポーツ文化部長、神原スポーツ局長、吉田地域スポーツ課長、  
松野競技スポーツ課長、新田男女参画・県民協働課長、穴山障がい福祉課長、  
尾崎長寿介護課主幹、黒田ねんりんピック推進課長、吉田保健体育課長、  
池田全国高校総体推進室長 外

(3) 報 道 なし

### 4 内 容

県民のスポーツに関する意識調査について、地域スポーツ課から説明を行った。  
これに対して、委員各位から以下のような意見・質問があった。

#### (久保田委員)

○e スポーツについて、詳しい内容となぜスポーツになるのかを教えてください。

#### → (地域スポーツ課長)

○e スポーツがスポーツかどうかとの議論は、スポーツ庁も現時点では結論を出してはおりません。様々な要件があり、フィジカルなものをスポーツという方もいれば、e スポーツをスポーツという方もいます。なぜ、地域スポーツ課が e スポーツを所管しているかと言いますと、当課で障がい者スポーツを所管しており、共生社会づくりにつながるものが同じ観点となるため、e スポーツはスポーツではなく、障がい者スポーツの範疇に入れて取り組んでいます。スポーツ庁のこともありますので、スポーツかどうかといわれるとはっきりと結論を出しているわけではございません。どのような取り組みをしているかと言いますと、3年前から県が購入した e スポーツの機器を県内の 16 障がい者施設に貸出しています。その施設の中にはモデル施設として、障がい者の方に e スポーツを楽しんでいただいて、それによってどういった変化が見られたかを見ております。モデル施設同士で通信できますので、対戦したり、e スポーツ大会に参加してもらったり、あるい

は東中南予ごとで一般の方との交流など、様々な取組みをしております。例えば、手や足の指しか動かせなかった重度の脳性麻痺の方にあつたオーダーメイドの機材をつくり、それが楽しみになって、リハビリ効果が高く、その人自身の生きがいとなったという一定の成果もあがっていますので、今後も進めていきたいと考えています。

**(田口会長)**

○私も体育大学に長くいたため、e スポーツを授業に取り入れるという意見もありました。e スポーツのゲームを作っている会社は何億とかの賞金を出します。VR といってゴーグルをかけ、操作して、ドローンがいろいろと動くといったものも e スポーツに入ることになります。AI の性能を活用して、体をあまり動かさなくても指先だけで様々な動作をしてくれます。私もかなりの種類を見ましたけど、若者がのめり込むのがなんとなく分かるような気がします。現在、韓国にはそのような大学までできています。日本でも専門学校で専門にやるところもあり、文部科学省として何もしないわけにはいかなくなっています。リハビリにはすごく向いているため、障がい者スポーツには大いに活用していただきたいです。

**(牛山委員)**

○e スポーツについて、県もこれから力を入れていくのだろうと察しているのですが、私は、障がい者の健康教室に関わらせていただいております。その中でも e スポーツに取り組んでいる方がいますが、肩こりがひどいです。みなさんがスポーツをする目的は、健康と体力増進が一番ですが、e スポーツで肩こりになるし、体脂肪が増えるというのは、いかがなものかなと思います。このあたりのバランスが悪いため、周囲のコンセンサスが得られないのだと思いますが、これについて県はどうお考えでしょうか。

**→ (地域スポーツ課長)**

○ご指摘のゲーム障害はのめり込みすぎるとか、あるいは肩こりがする、目が悪くなるなど、当然想定されます。令和2年度当初から専門家である愛大医学部の先生にお願いして、モデル施設の方を対象にオンラインでそういったレクチャーをしていただき、「やりすぎない」、「健康を損なわない」かたちで取り組めるように事業をすすめています。各施設にはそのようなかたちで毎年お願いをしております。今後、取組みを続けていくためにはそういったことも必要であると認識しております。

**(牛山委員)**

○e スポーツがおもしろいと思っている方がゲーム性だけではなく、そのなかで自分がアスリートになって運動する感覚を得て、スポーツが好きになるというように繋がってくれば良いと思います。逆に身体活動を伴わないということで、障がいのある方でも機能が十分使える部分や使えない部分、劣っている部分や劣っていない部分があつて、e スポーツにのめりこむと使える部分の機能が低下していくことも当然あります。身体機能を落とさない

よう組み合わせないと、健康づくりや体力づくり、それから機能を低下させずに維持、もしくは機能をより高めていくことに繋がりにくいです。障がい者スポーツに関わる人間として、この状況では e スポーツを推進したくないなと思います。その部分がクリアにならないと e スポーツを障がいのある人たち一斉に「もっとやりましょう」というムーブメントにはなっていないと思いました。

#### → (地域スポーツ課長)

○一つだけ補足しますと、ご存じの方も多いと思いますが、ボッチャは主にマヒがあるような方がしている種目で、県が実施している事業の中で、タブレット上でできるボッチャのゲームを専門学生の協力を得て作りました。障がい者の方にリアルなボッチャではなく、こういったものをまずはゲームで体験してもらいたい、興味を持ってもらいたいと思っております。また、昨年度から県民ボッチャ大会を開いておりますので、タブレットで体験した後にそういった場に来られて体験していただきたいと思っております。

#### (大野委員)

○まず、この資料をいただいて一番に思ったのは「関心度」や「するのも見るのも好き」などの様々な分野で、パーセンテージが少しずつ上がっているのがとてもうれしく思いました。しかし、「関心がない」とか「嫌いだ」というのもまだ多くて、その理由が「疲れる」「興味がない」という部分で、これをどうしたら改善できるかというところに視点を持っていくと、もっとスポーツが好きになってくれるのかなと思いました。第一要因が「施設がない」「やりたいスポーツが身近にない」で、これに対する行政の方の動きが県民に対して浸透していません。「こんなことやってますよ」「こういったことができますよ」をもっと広く知っていただけると違ってくるのかなと思いました。各々の分野で地域スポーツクラブが活動していますが、やはりスポーツの種類が限られています。ここでもう一度そういう方々がもっと自由に活動できるように助成金や場所の支援を行政でやっていただけるとありがたいなと思いました。私が預らせてもらっている児童・生徒・幼児は、「好き」がすごく多く嬉しいのですが、やはり興味や関心がなくなってきている部分が上がっています。私事で申し訳ないのですが、年間を通してスイミング・サッカー・バスケ・テニス・乗馬・キャンプ・ダンス・全身運動・野球・空手・スキー・体操・カヌー・ヨットなどのスポーツをたくさんの子どもがやっていきましょうという「ディスカバリークラブ」を作りました。例えば、野球はマンダリン、サッカーは愛媛FCにお願いをしてその専門の方々の指導を受けます。そうすると親や子どもから「自分が何をしたいのかわかった」や「子どもに何をやらせたいのかわかった」、「子どもがどういった競技に興味があるのかわかった」などの意見を頂きながら実施していましたが、今年休止しました。その理由の一番が親の共働きが多くなり、送迎が非常に難しくなっていたことです。15年ぐらい続きましたが、この3年間のコロナの影響で、小さい子どもを不特定多数が集まるところに送り込むのが不安というところもありました。少人数でもやっていきかけたのですが、

やはり専門で教えてもらおうと謝礼をお支払いし、運営が難しくなって、今年は中止することとしました。そういう部分ではコーディネーターを増やしていただきたいと思います。様々なスポーツを経験したアスリートの方々がコーディネーターとして指導し、子どもが野球・サッカー・バスケを好きになってくれたら嬉しく思います。そういうふうになれば、多少なりとも収入が団体に入ることになります。子どもにたくさんのスポーツをさせられる機会を行政がまず主導になって考えていただきたいです。子どもの運動が活性化できると、小・中学校の「疲れるから」「おもしろくないから」はなくなります。興味を持つことや良い指導者がいることで続いていくと思います。また、競技性を高めるためには、より高いレベルの指導者を育ててほしいです。小・中学校でも選抜制度があり、一部の能力の高い子は環境に恵まれてやっています。つまり強化の方にいきすぎて、そのセレクションに落ちてしまった、子どもたちに対する環境がありません。その次の段階のところに指導者を送り込み、あなたたちは将来、選抜の子を抜いて前に行くことができるよと、その子の良いところを褒めて、子どもたちももっとスポーツが大好きになり、興味がでて、疲れても頑張れる方向になっていかないかなと思います。

愛媛県スポーツ推進計画の施策項目の比較について、地域スポーツ課から説明を行った。

#### (福井委員)

○私自身、バレーボールやビーチバレーをしましたが、現在ではインドアやビーチスポーツを含めて様々な分野で活動するなかで、幼児期のスポーツ環境が整っていないなと感じています。特にバレーボールはサッカーと比べると全然環境が異なります。先ほどの意識調査のなかにもありましたように、いかに幼児期からスポーツをやるきっかけを作ることが大事なのか、継続するための環境を整えていくことが指導するうえでも非常に重要だと感じています。今後、中学生では週末の部活動が地域移行をしていく方向になっていますので、クラブの充実化や環境整備が非常に大事になってくると感じております。私自身もクラブを作って運営していますが、施設が足りない状況や活動を知ってもらう重要性も感じています。

#### (清水委員)

○ウィズコロナに向けた(1)①のスポーツ習慣の定着は今の時代の流れに沿った項目になっていると思います。また、(1)⑤のeスポーツも一つのキーワードになり、共生社会の実現は障がい者の方にも通じるものになるため、項目として出るのはすごくありがたいなと感じております。(2)でも運動部の地域移行は大きな課題になっていくと思いますので、こういうところも拡充して特出ししてきたところや、(5)のDXを活用したスポーツ振興も大事だと思います。(4)も松山空港からの国際線を利用しての海外とのスポーツ交流など、今後のウィズコロナの社会の中で広げていただきたいと思っております。ぜひ項目に沿って中身をたたき上げてもらえればありがたいなと思います。

**(牛山委員)**

○DXとIT化とはどのように違うのでしょうか。具体的な事例を示して教えていただければと思います。

**→ (地域スポーツ課長)**

○単なるIT化というのは、手段であり、ネットワーク環境を駆使して新たに変革していく、移行していくというイメージです。我々が考えているのは、現実的にはIT技術を駆使したという形になるかと思います。例えば、今取り組んでいますが、野球関係ではベースボールラボと言いまして、様々な野球選手の遠投距離やスピード、パワーなどをデータ化して、それを活用して高校生を指導していきます。また、競技力向上の部分においても様々なデータを駆使し、選手に合ったトレーニング方法で指導していきます。そういった試みをしています。また、プロスポーツ球団自らが実施し、ファンの増加につながるものであれば、ぜひ県としても支援していきたいと思います。例えば、スタジアムに行ったら、初めて見に来た人でもルールが分からないことがないように、スマホとイヤホンがあれば、球場内でプレーなどの解説が入るシステムであるとか、貸出したメガネで選手を見ればその人の身体的特徴が出るなど、そういったプロスポーツ球団がファン獲得のために新たな取り組みをすることについても、県ではスポーツの振興の一つと考えているので支援していきたいと考えております。

**(田口会長)**

○今メガネをかけると様々な情報が流れるため、作業現場ではその情報を使って、間違いがないように作業をしています。医者が治療する中で、患者さんの目の動きを撮って、言っていることが嘘かどうか分かります。そういう便利な時代で、画像診断もAIの方が良くなっています。プロスポーツ選手を見ていただくと体にいろいろなものをつけています。ツール・ド・フランスでは選手が腰のところに携帯電話のような機器をつけています。あらゆるデータがミッション支援センターにいき、水分補給を少しした方がいいとか、疲れているから後ろに下がれなど指令が来るなど進化しています。スポーツだけでなく職場や医療現場も含めて、壁があるように見えて壁がなくなっています。話している言葉を翻訳して日本語にしてくれます。eスポーツもそのうちのひとつになります。そのため、教育現場もがらりと変わり、私のいる医療創生大学では新しい科として作ろうとしています。

**(牛山委員)**

○新規のものを立ち上げる時にはどこまでが到達目標で、どう予算化をしていくのか、慎重になった方がいいのかなと一人の委員として思っています。DXは現在、日本の政府自体が推進していますが、大きい目標のスポーツ実施環境の整備と充実に、予算の全体枠の何パーセントをかけるのかというのが非常にデリケートな問題ではないかと個人的にはします。ウイズコロナでやっていくためには、予算をかけないといけないスポーツ実施環境の整備と充実があります。コロナの影響を受けながら様々な課題が出てきた場合にどうして

いけばいいのかと考えたときに、DXの活用がどう生きてくるのかを丁寧にしたほうが良いかなと思いました。

**(田口会長)**

○家電の値段があがっていますが、翌年には落ちます。お金をかけて作っても翌年には半額になることが、この世界では起きています。どこまで投資するかは非常に大きな要素だと思います。医療現場にいてと思いますが、年間に世界中で約40万件の英文の論文が出て、瞬間に取り出すことができます。また、コロナの患者が疾患なのか、普通のインフルエンザなのかという区別がつくぐらいすごい勢いで進化しています。

**(寺尾委員)**

○スポーツ協会といたしましては、アンケートの中にもありますが、スポーツが嫌いになる人をできるだけ少なくしたいというのが一番の目的です。そういう意味で、昨年度から日本スポーツ協会の開発したアクティブチャイルドプログラムでは、幼児などを対象に運動遊びをして体を動かし、嫌いにならないようにする取り組みとして県のスポーツ協会でも推進しています。また、今回の計画の全体的な策定項目自体はこれで問題ないかと思いますが、ある意味、計画の中で濃淡が出てくると思います。そういう意味で新しい施策項目でいけば「(1)スポーツ習慣の定着促進」は非常に大きい項目だと思っておりますし、「(2)スポーツ実施環境の整備拡充」の中の「③運動部活動の地域移行に向けた準備」も競技力維持・向上においても非常に大事な項目だと思っております。前回の審議会で示された計画策定スケジュールでは令和5年3月末に推進計画の策定となっておりますが、それに合わせた形で県の予算が分かれば教えていただきたいと思います。

→ **(保健体育課長)**

○部活動の地域移行に関して、国では対前年比で大幅な予算の拡充をしております。その予算の中には地域移行を進めるために、各市町などがコーディネーターを設置する経費を支援する項目も新たに設けられ、県としても支援していきたいと考えております。

**(友澤委員)**

○先ほど説明いただいたDXの取組みと「(3)スポーツ医科学の活用」とが非常に重なる部分が多いなと思いましたので、伸ばす部分と充実させる部分を区別化し、投資感覚の部分もかなり要素としては入っているため、良いように整理していただきたいなと思います。また、スポーツ部局ができ、「(1)子どもの運動習慣の定着」や「(2)学校体育活動の充実」では運動部活動にしても、教育委員会との連携は非常に大事な部分だと思います。また、小学校はだいぶ人数が少なくなりましたが、愛媛大学の先生方と協力しながら、体育の楽しさを精一杯教えてくれる取組みを一所懸命やってきました。当時は小学校の先生もすごく熱心に取り組んでいただいて、良い授業を展開してもらったと思っております。運動やスポーツをするのも見るのも嫌いといった生徒をより少なくするのは、やはり小学校からの

体育の授業での取組みがひとつの大きな要素になると思います。小・中学校体育の充実を今一度取り上げていただけたらと思っております。本校でもタブレットの活用やICTの活用は体育の先生方も授業研究を一所懸命にやっておりますが、やはりうまく使えば非常にわかりやすい体育の授業になっていくし、苦手な子たちもわかりやすく体育ができるようになります。興味を持たれるような授業研究にもできるかと思っておりますので、ICTの活用は中学校あるいは高校も授業実践の中でどうやっていくか、教育委員会と連携しながら推進してもらいたいと思います。

#### (中川委員)

○調査項目を見ると納得できる部分、今後の課題となる部分はかなり明確に出ているなど感じました。私も前回お伝えしたことですが、幼児期からの運動経験というのは非常に大事であり、注目したいところです。特に幼児期は体を動かしたいという子どもが多いのではないかと思います。そうするとやはり、そういう場が必要になるなと思います。私事ではありますが、孫を連れてよく公園に行きますが、子どもはそこにあるものを使って体を動かしたいという気持ちが起こります。しかし、ある時に公園に連れて行くと、駐車場がありませんでした。駐車場がないところは県内でたくさんあります。運動公園は駐車場が有料になっています。やはり施設では駐車場の関係が非常に影響しているのかなと思います。やはりそこに行って運動をしてみようかというような気持ちが起こるかどうかが非常に大事なところかなと思います。調査項目にありました、「運動スポーツを見るのを好きになったきっかけ」では、児童生徒でも「子どもの頃からしているから」が非常に多いというのは、幼い時からの経験が繋がっているだろうなということを確認しました。そういう場として総合型の地域スポーツクラブが絡んでくると地域をあげての底上げとができるのかなというふうに思います。予算化により発足したクラブがありますが、数年後には自分たちで運営していかなければならないという状況になり、なかなか前に向かって進まないクラブがあったことを聞いたことがあります。予算化は難しいところがあるかもしれませんが、幼児期からの繋がりということでそういうところの活性化も是非お願いしたいなと思います。項目であげていただいたところは非常に重要なことが挙げられているかと思いますが、やはりそれぞれの場の実情や実態、関係者の声を吸い上げていただいて、実態に応じた内容、中身を詰めていくのが特に必要なのかなというふうに思います。運動部活動の地域移行に関しても、実際に直接関係する中学校の先生はどういう思いを持っておられるかとの現場の声をしっかりと確認していただきたいということと、そういう施策を進めていくうえで指導者確保も必要になってくると思いますので、整えられたうえで、踏み込むことができるようにしていただきたいなと感じております。

#### (渡部委員)

○今いろいろと話題に出ております運動部活動の件について、調査の中で「学校にその部活動が無いから」がありました。数年前に全校生徒50人の学校に勤めていたことがありますが、生徒数が減少してきて、その当時部活動の維持ができないのではないかと。そういっ

た学校が県内ではかなりあるのではないかと思います。現在私が勤めている学校は 600 人の子どもがいて、部活が 18 あります。ただし、これが数年前と比べると生徒数が 200 人ほど減っているにも関わらず、部活動の数は一緒の状況です。先生の数減ってきているのに部活動は 18 あり、どうにかしないといけないという議論が出ています。子どもたちにとっては選択肢が少ないというのがまず現実かなと思います。そして次期計画施策項目の中に位置づけていただいております「運動部活動の地域移行に向けた準備」は非常にありがたいなと思います。あわせて、施設や指導者のことで様々な課題が考えられますが、そこもしっかりと位置付けていただいているので非常にありがたいなと思います。運動部活動の意義として、まさにそういったニーズに応じることや多様な子どものスポーツ環境を確保することが今回謳われておりますので、地域移行になったときに期待できるところが多々あるのではないかなと思っております。

#### (河野委員)

○私はスポーツ少年団で活動しておりますが、団員数がかなり減っている状況です。それぞれの少年団でいろいろと工夫をして、子どもたちを勧誘する努力をしておりますが、学校などへのお願いでも、学校長の判断で協力してもらえるところ、もらえないところがあります。総合型地域スポーツクラブの育成支援の項目はありますが、スポーツ少年団も支援をいただきたいと思います。少年団には研修を受けた指導者もおり、スポーツ少年団の認知度を高めていただけたら、子どもたちの運動習慣の定着にも繋がるのではないかと考えております。アンケートにも総合型スポーツクラブを知らない人がかなりいるように思います。クラブの立ち上げに私も関わらせていただきましたが、今はどのような活動をしているのかなど。そういう意味で育成支援の前にスポーツクラブの認知度を高めていただければと思います。

#### (久保田委員)

○中身についてはこれから協議をされると思いますので、項目に関してはこれで良いと思います。

#### (緒方委員)

○話が広がるかもしれませんが、私は教育委員会連合会として来ている訳ですけども、仕事で幼稚園の園長もしております。最近特に感じることは、共働きの保護者の方が増えていきます。幼稚園、当然小学校にも繋がっていくと思いますが、地域のスポーツに参加しようとするとならずそこに連れて行かないといけない。また、そこで様々なお世話をしないといけない。そういうのは今までも結構あったと思います。私自身も経験しましたが、結構な家庭で大会や練習試合に行くことになると車を出し、お茶の準備などをしていました。でも、そういったことが今できにくくなっている現状があるのではないかと思います。今、共働きの家庭や子育てに対して、様々な施策が取り組まれていると思いますが、スポーツに参加しにくい家庭環境にもなにかサポートができるような制度ができないのかなと思います。

ます。そのなかで多様なスポーツを子どもたちが経験すれば、それがスポーツ好きや生涯スポーツに繋がっていくのではないかと感じております。

#### (大瀧委員)

○学校体育においては教員数の確保が必要だと思います。教員数の減少により土日に部活ができません。でも、なかには土曜だけでもしたい教員もいます。そしてやはりお金の問題でもう一人増えて、二人制だったらできるとかあるかもしれません。また、体育の教員の新規採用では女性がほとんどいません。特に高校はほとんどいません。日々見ている生徒たちを教えるのと外から来られる方が教えるのとはまた違います。私は土日もずっとやってきて、それなりに今でも付き合いがあったり、子どもを育てるうえでも、いい面もあったと思います。私が大学生の時、幼稚園に運動を教えにいったことがあります。幼稚園も大学と連携する形をとることはすごく大事だと思います。他県で様々なスポーツをする法人のクラブがあり、サッカーを選ぶと今でもサッカーを続けています。私はジムに行っていますが、そこには靭帯を切って激しい運動はできないけど、ヨガだけやりにくる人もいます。また、コロナの影響で閉鎖した施設のインストラクターや、各週休みが決まっているスポーツジムを年何回かでも借り上げるなど有効に活用することができます。運動は仲間がいて、楽しんでやりたいものです。私も一人で散歩をしています。みんなでできたらいいなと思います。

#### (大野委員)

○この資料は県のホームページに掲載されていますか。

(地域スポーツ課長)

→本日の資料は今日初めて皆様にお示ししたものです。

#### (大野委員)

○私、この資料を見て、こういうふうと考えていただいていることにわくわくします。そして、次期計画の施策項目から具体的な内容があり、それを掲載したら、スポーツに関心のある方は必ず見ると思います。でもそれがあることを知らなかったら見ることもありません。マスコミを通じてこの審議会がこんなことを考えている、こんなものがあるといったことを広めると、みんなが見るようになってきます。施設に行っても駐車場が無い、そしてたら日曜日だけでも臨時駐車場を設ける、これは大変な作業になります。でも人がそれでスポーツを楽しんでくれる、前向きになっていく。やることがどれだけ大変かは私も運営していて知っています。部活動の件でも、何年の何月ぐらいまでにはこんな具体的なものが出る予定ですが構いません。それからジュニアアスリートの発掘強化かスポーツ医学の食育で本当にボランティアを招いてくださるのか。その開校式をするスポーツ団体には必ずボランティアがもれなくくっついてきます。子どもたちを指導する中でスポーツだけができれば良いという選手を作るのではなく、こういう心や幅のある人間性を高めるこ

とも大事になります。

(地域スポーツ課長)

→年明けに開催する次の会議では施策の具体内容をお示しし、パブリックコメントでご意見をいただくという段取りを考えております。